

田澤耕 著

『カタルーニャを知る事典』

(平凡社新書、2013年)

評者 坂東 省次

世界的なチェロ奏者パウ・カザルスは、1971年10月24日、国連総会でこう自己紹介をしている。「私はカタルーニャ人です。今日ではカタルーニャはスペインの一地方になっていますが。では、カタルーニャとはどんな国だったのでしょうか？カタルーニャは世界でもっとも偉大な国でした。なぜだか申し上げます。カタルーニャはイギリスよりはるか以前に、世界最古の議会を持っていました。」

カタルーニャはイベリア半島の北東部に位置する逆三角形の地域。面積は約3万200平方キロ。スペインの面積の約6.3%を占める。人口はおおよそ750万人。工業や観光産業の一大中心地で経済的に豊かで、なりは小さいが、スペイン全体の約19%を占めるそのGDPはデンマークに匹敵し、アイルランド、フィンランド、ポルトガルを上回る。

今日、カタルーニャの首都バルセロナは建築家ガウディ、画家のミロ、ピカソ、ダリ、サッカーのバルサなどによって世界的に知られている。

日本でカタルーニャが知られるようになるのは、オーウェルの『カタロニア讃歌』（1966年）や樺山紘一の『カタロニアの眼』（1979年）を通してであったが、1992年に開催されたバルセロナ・オリンピックによってその存在感を高めたことは言うまでもない。

しかしまた、カタルーニャの存在を多くの著書を通して広く紹介してきた著者の田澤氏の貢献も大きいであろう。氏とカタルーニャとの出会いは、1978年に遡る。当時勤めていた東京銀行（現・三菱東京UFJ銀行）からバルセロナに語学研修生として派遣されたのである。スペインでは独裁者フランコが3年前に死に、民主化に向けての歩みが始まりかけていた頃であった。カタルーニャは長い抑圧の時代から脱出しつつある中、カタルーニャ語もまたその地位を回復しつつあった。そんな光景が氏の中に眠っていた語学への関心を目覚めさせ、氏は6年後

銀行を退職して、大阪の外国語大学大学院でカタルーニャの言語とナショナリズムについて研究を開始したのであった。その後、研究の場は本場バルセロナの大学に移され、カタルーニャ語学で博士号を取得している。

氏は専門をカタルーニャ語・カタルーニャ文化としており、その著書・訳書はカタルーニャ語からカタルーニャの歴史、文学、芸術、スポーツと多岐に及んでいる。その一部を挙げる。

『カタルーニャ 50のQ&A』（1992年）、『物語カタルーニャの歴史』（2000年）、『冷たい肌』（翻訳、2005年）、『日本語カタルーニャ語辞典』（2007年）、『ニューエクスプレス カタルーニャ語』（2010年）、『ガウディ伝—「時代の意志」を読む』（2013年）、『リアルとバルサ 怨念と確執のルーツ—スペインサッカー興亡史』。

以上のようにカタルーニャの全体像の構築を目的とするいわばカタルーニャ学を目指してきたかに思える氏の知的営みは、長い間の蓄積を経て、ついに到達したのが本書『カタルーニャを知る事典』である。まさに氏の研究の集大成以外の何物でもないであろう。

本書はI「カタルーニャとは」、II「政治・経済—スペインの中のカタルーニャ」、III「歴史—中世の栄光、長い停滞、そして復活」、IV「言語—民族のアイデンティティとしてのことば」、V「芸術—創造性のDNA」、VI「文学—世界水準の文芸」、VII「スポーツ—カタルーニャの闘魂「バルサ」、VIII「食—美食家の天国へ」、IX「民俗・芸能—祭に彩られる街」、X「奇跡の都市バルセロナ」の10章と付録「意外なところにカタルーニャ」から成る。

今バルセロナを訪れる日本人は後を絶たないようだ。これからバルセロナをさらには広くはカタルーニャを訪れる日本人には、本書は必携の書となること間違いのないであろう。

ばんどう しょうじ（教授・日西交流史）